

無想録 十二 ユーモア

人間は泣く、人間は怒る。だが人間は笑う生物である。

泣くことを知り、怒ることを知って、笑うことを知らないものは人間の不具である。

泣くこともなく、笑うこともない世界は疲れるだけである。笑ったがいい、笑ったがいい。肩の凝りがとれる。

高等女学校で講演する。小さなことで講堂が割れるほどどつと笑う。しかしちよつとした哀話でもすぐ泣きはじめる。心が柔らかだからである。若いからである。

泣きもせず、笑いもしないのは、老人の、しかも教養のない人の集まりである。

まじめくさった中の滑稽味、子供の所作や言葉の中の滑稽味、滑稽は、人間の安全地帯である。

私は滑稽味のわからない人とともに住むのはおそろしい。

「おじさんの馬鹿やい」子供は平気で言う。大臣にでも平気で言う。

「何！馬鹿だ！人を侮辱すな！」と怒る人があれば恐しい人だ。

力を入れなければならぬのも人生だ。力をぬかなければならぬのも人生だ。入れている時にぬき、ぬいていい時に力こぶを入れる。人間の貫禄はここらできまる。

ふんどし
禪を送りかえされたのを、菓子箱と間違えて仏様に供えたという話、

自分の好きな「小豆の味噌だき」の壺を食べておきながら、「これはまあ私の壺には、入れるのを忘れられたもので」と二度もらうのがくせであった坊さんの話、

人格のうるおいとしてその人をなつかしく思わせる。

弥次、喜多の話は、人間の笑いの結晶であろう。

滑稽気分で言ったことが、悪意でとられる。本気で言ったことが茶化される。ともに人と人が傷つきあう。

人が悪意でしかけた喧嘩をも笑って軽く受け流す人、この人が本気になったときたら、どんな仕事でもやりとげる人だ。この人に限って笑いから遠ざかることはない。

治まる家は笑う。笑った時は皆が一つになる。福が来るのも当然である。笑い得る者だけが、安らかに食い、安らかな眠りにつくことができる。

浜口さんは容易に笑わなかったという。だが絶対に笑わなかったのではない。あのまじめな大きな風貌かおが漫画になった。漫画はユーモアである。漫画にならない人は、どんな知恵者でも、大きな器にはなれないという。

ユーモアを解しない人は人生を解しない人である。余裕のない人である。あまり文句が多すぎる。

電車の中で足を踏まれたぐらいは、相手を打ちなぐったりしないでも、相手をあんまり恐縮させずに、「いや、どういたしまして」ですましたらどうだろう。